

30余年の時を経て

「銅山峰のツガザクラ群落」 国の天然記念物に指定へ

文化振興課

☎65・1554

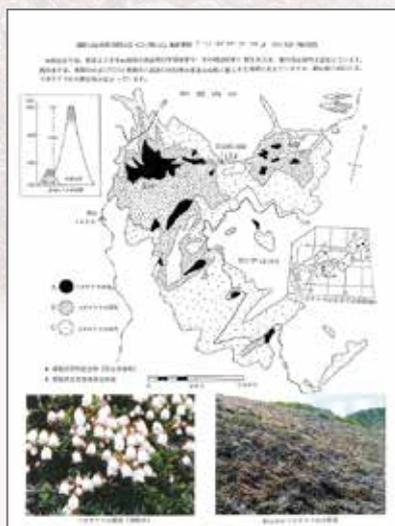
FAX 65・1306

銅山峰のツガザクラ群落

銅山峰周辺に生育する高山植物『ツガザクラ』が、平成30年11月16日の文化審議会で、国の天然記念物に指定するよう文部科学大臣に答申されました。

今後は官報告示を経て、昭和26年に指定された「一宮神社のクスノキ群」に続く、市内2番目の国指定天然記念物となります。

◆国指定天然記念物へのあゆみ



ツガザクラ分布図
(石川早雄氏作成)

ツガザクラを国指定天然記念物にしようとする取り組みは約30年前にさかのぼります。

昭和63年に市文化財保護委員の石川早雄氏が、初めて銅

山峰のツガザクラ分布図を作成し、その植生の概要を明らかにしました。国内の生育地の南限であることに加え、通常は標高2千500m級の高山帯に生育するツガザクラが、標高1千300m前後の低山であるにもかかわらず、国内でも類を見ない規模で群生している

ことは、専門家の間でも注目の的となり、市文化財保護委員会、四国植物研究会総会などにおいて国指定を働きかけるよう議論が始まりました。

機運の高まりを受け、平成5年には大場秀章東京大学総合研究資料館助教授、森川国康松山東雲短期大学教授ら植物研究の第一人者を招いて現地調査などを行いました。直ちに国指定へ結びつくような結果を得るには至りませんでした。

◆『ツガザクラ』とは

ツガザクラはツツジ科の常緑小低木で、5月中旬から下旬にかけて、淡紅色で釣り鐘型の花（直径5ミリ程度）を咲かせます。

県レッドデータブックで絶滅危惧ⅠB類に指定されており、新居浜を象徴する高山植物として広く知られています。





その後、平成18年に大きな転機が訪れます。それまで、銅山峰のツガザクラは、銅山開発後の植林事業に伴って八ヶ岳（長野県）から持ち込んだカラマツに付着していた種子が根付いたものだという説がありました。

しかし、湯本貴和総合地球環境学研究所教授、笠木哲也金沢大学研究者らがDNA分析を行った結果、銅山峰のツガザクラは氷河期からの遺存種である可能性が高いということが突き止められたのです。

それに加えて、日本三大局地風の一つに数えられる「やまじ風」の強風が吹き抜ける気象環境や、砂礫質（砂や小石）の土壌といった条件が重なって大群落を維持しているという、極めて希少価値の高いものであることが判明しました。

この分析結果には国も大きな関心を持ち、平成19年、平成24年、平成30年の3度にわたって文化庁調査官による現地調査と、国指定に向けた生育状況の確認や指定範囲の検討が行われました。

◆ツガザクラ保護のために

調査研究と並行して、平成8年には住友林業(株)、住友金属鉱山(株)、住友共同電力(株)、別子山村、新居浜市の5団体によって、ツガザクラ自然保護協議会を設立しました。

協議会では、新居浜南口タリークラブからの寄付金を活用した保護柵を設置するとともに、地元の登山愛好家グループ「憧山会」に委託し、定期的なパトロールや定点観察を行うなど、ツガザクラの保護活動を続けてきました。

近年では新居浜南高等学校ユネスコ部が保護活動の新たな担い手として精力的な活動を行うなど、次代への継承も着実に進められています。

◆ツガザクラを後世に

今回の国指定は、ツガザクラそのものが持つ希少な高山植物としての価値に加え、一部の愛好家や専門家だけでなく、市民、企業、学校、行政が広く連携し、市を挙げての保護意識が定着していることも高い評価を受けた理由の一つです。

かつて銅山峰周辺は、大量の森林伐採や銅の製錬時に発生した亜硫酸ガスによって植生破壊を受けました。しかし、製錬所の移転や毎年100万本を超える植林など、先人たちによる解決策の取り組みによって、現在のような青々とした自然を取り戻したという歴史があります。



憧山会と新居浜南高等学校ユネスコ部による定点観察と保護柵点検の様子

別子銅山発祥の地として今も数多くの産業遺産が眠り、環境問題を克服した歴史を持つ森深い山中にツガザクラの大群落が広がる姿は、さまざまな立場の違いを超え、今も多くの人々の心を捉えてやみません。この国指定を機に、より一層の保護を図り、貴重な文化財であるツガザクラを後世に伝えていきましょう。

※組織名、肩書などは全てその当時のものを記載しています。